

麻薬に溺れ、大切な弟を巻き込んだ過去 『一人体験劇』で訴え 13年

内谷正文さん（俳優、映画作家）

自分自身ではどうにもならない

誰でもどこでも簡単に薬物が手に入る世の中、時代。友達、彼氏がやってるから、カッコイイから、ちょっとした興味から薬物乱用につながっていく……。私も弟も、そんな一人でした。

私は幼い頃から目立ちたがりで、その影響もあり、思春期には暴走族、薬物と、仲間とともに好き勝手やってました。でも、いつも何処かで中途半端な自分がありました。そして「薬物依存症」という病気と関わることになりました。

弟が薬物依存症になってしまった時、両親にとっては「まさか」という出来事であったに違いありません。でも、私は知っていました。知っていて止められなかった。大切な弟をどん底の世界におとしめてしまったのです。

私は芝居を22歳から始めましたが、並行して薬物も使いつづけていました。地元の仲間や弟と、よくないことと思いつつもやめられませんでした。役者は3日やったらやめられないと言いますが薬物も同じですね。一度使ったら一生関わって生きて行かなきゃならない、そんなこと全く考えてもみませんでした。



ちょっとしたきっかけで薬物を使うようになり、やめられずに薬物依存症になり、凶悪な事件、自殺につながることも珍しくはありません。そこにまつわる人々、家族にとっては本当に地獄の苦しみです。薬物をはじめのきっかけは簡単ですが、やめて社会のなかで生きていくことは容易ではありません。

私の周りにも薬物で苦しんでいる人がたくさんいます。「どうしたらいいのか?」と考えても、薬物を使っている人間に何を言っても通じません。彼、彼女らは現実でない現実を生きているからです。一度、依存症まで陥った人間は、「今日一日薬物をやらずに過ごす、そしてまた今日一日やらずに過ごすしかない。そうして一日一日を生きていくしかない」。自分の意志ではどうにもならないのです。

「薬物依存症という病気は、完治はないが回復はある。そのためには子どもを突き放して家族は逃げろ！そしてあなたたち家族も共依存症という病気だ！」

私と母が、薬物依存症回復のための自助グループの施設、「茨城ダルク 今日一日ハウス」の代表である岩井さんに言われた言葉です。岩井さんは、こうも言ってくれました。「(薬物依存症の)本人は俺たち仲間が救う！だから家族は家族で勝手に生きていけ！」

ダルクに出会わなかったら私は今ここにいません。一人体験劇もしていません。全ては必然であり前に進むための今日一日なんですね。「自分のせいで……。なんとかしなければ」という思いで立ち上がり、家族とともに死に物狂いで「今日一日」を生きた経験をもとに、一人体験劇をつくりました。

逃げる勇氣、恥かく勇氣、夢をもつ勇氣……

今、私は自分の過去をさらけ出し、家族の恥をさらしながら、薬物から逃げるしかありません。そうすることで薬物に戻らないでいられます。もうハンパもんはやめにしたい。そんな今の自分に出来ることは、芝居で訴えること。「薬物依存症になってしまったら、待っているのは、墓場か精神病院か刑務所」。将来ある若者たちに薬物の怖さ、現実を知ってほしい。そして薬物依存者のことも理解して欲しいと考えました。

薬物依存症をテーマにした“一人体験劇”「ADDICTION～今日一日を生きる君～」と体験談で全国の学校を中心に公演を重ねています。2005年2月より公演開始し、現在は一年に20公演ほど行っています。北海道から沖縄まで約200回の公演をしました。これが私の新しい生き方です。

薬物を使った人間は新しい生き方を見つけなければなりません。弟は全てを捨て、新しい土地に移りました。そこで結婚し、二人の子どもにも恵まれ、社会に出て働いています。弟は自身の病気を認めながら今日一日を大切に生きています。薬物依存者の多くは社会復帰できずに家族もろとも地獄に落ちている現状で、弟はそのなかでは本当に珍しい回復の事例です。

役者である自分、薬物依存症者である自分、共依存症者である自分、そんな私にできること。自分のために、私は伝え続けます。2014年からは、少年院での

慰問公演も開始、2015年より『今日一日を生きるLIVE プロジェクト』を立ち上げ様々なアーティストとコラボレーションを行っています。2016年にはニューヨーク、マンハッタンでの一人体験劇の公演も実現するなど、活動の場を広げています。

薬物依存症という病気の現実を知ってもらうための活動、これは一生貫いてやっていこうと思っています。



一人体験劇で伝えたい思い

私は薬物を使っていた人間です。そして、たった一人の大切な弟を薬物の世界に引き込んだ人間です。自分自身薬物依存症者として、またその家族として、両側からの経験を通してひとりでも多くの人に薬物の現実、怖さを知ってもらいたい。でも私は、自分自身が薬物から逃げるために活動を続けている。だから「薬物やるな」なんて偉そうに言えない。ただ、薬物やったらこうなるよって実感を込めて演じたい。

薬物依存症は回復はあるが完治はない、本当に怖い病気です。なんとかしなければと、もがき苦しむ家族達も「共依存症」という病気になってしまいます。その家族の思考、行動が薬物依存へと追い込む悪循環。薬物はこうして、使っていない周りの人間までも巻き込み、どん底へと陥れるのです。

人間が作ったもので人間が減びていく、その怖さを知ってもらうためにも「ADDICTION アディクション～今日一日を生きる君～」を演じたいと考え

ました。しかし、ただ劇場を借りて芝居しても自慰行為にすぎません。いいことしてるような気分になって「はい、終わり」じゃ、意味はないと思っています。友達や知人だけに見てもらってもしょうがない。薬物のことで悩みを持っている人、苦しんでいる人、これから薬物の誘惑が襲ってくる若者、その家族に見てほしいと願っています。



芝居を見て病気が治るわけでもないし、悩みが、苦しみが解決するわけじゃない。でも「どんなことがあっても、薬物はいけない」という意識を頭の片隅にでもいいからインプットしてほしいのです。

施設や学校などで活動を続け、一人でも多くの人に知ってほしい現実があります。薬物を使っている人間だけをなんとかしようとするのではなく、その家族、仲間、地域、社会、全体が一丸となって考えていかなきゃいけない問題だということです。薬物を使う前に防ぐ。依存症になってしまった人は強い心をもって生きていく。この一人体験劇がそのお役に立てればと考え、活動を続けています。

そして昨年、この一人体験劇をもとにした、映画が生まれました。

映画化、映像グランプリ受賞

今まで以上に多くの方々に薬物依存症の現実や怖さ、そして家族の大切さを知ってもらいたい。苦しんでいる人に「回復の光」があることを知ってもらいたいとの想いで、映画「まっ白の闇」を作りました。

共同監督である大島孝夫さんと出会い、一人体験劇を映画にしようという話から、台本、キャスト、スタッフ、チラシ、クラウドファンディング、撮影場所、衣装、小道具、ヘアメイクと、映画を作るためにさまざまな方々のお力をお借りして、さまざまな制作作業を経て、昨年1月に撮影スタート。

不慣れな初監督の私と共に闘ってくれるスタッフと出演者、ほか多くのおみなさんのご協力で、完成した映画です。

「今日一日、クスリを使わずに生きる！ 今日一日使わずに止め続ける！」私自身にとって、一人体験劇や映画の活動は、自らが薬物の世界に戻らないため、また薬物を使わないための手段でもあります。

弟は薬物依存症で施設に入るまでに苦しみました。

た。そして、そのどん底から回復するために全てを捨てて、全く知らない土地で“新しい生き方”を見つけ生きています。一方で、私の新しい生き方は、自らをさらけ出し薬物依存症の現実や怖さを訴え続けて行くことです。

薬物を使っている人間も苦しまますが……、本当に苦しむのは家族なのです。薬物依存者本人として、薬物依存者の兄弟を抱える家族として二つの視点を経験したからこそ作れた映画です。家族や仲間の大切さを感じる作品に育てていくために、一人でも多くの人に観てもらい、繋がっていったらと思っています。

goodbye drugs goodbye addiction

映画「真っ白の闇」

兄の影響で興味半分から始めたマリファナ。ある日、俊は大麻所持の現行犯で捕まる。そして、留置所での出会いがキッカケで、さらに覚せい剤に手を出してしまう。俊は覚せい剤の虜になり、家族までも地獄に引き込んでいく。兄の昌は自分が“ヤクブツ”の世界に引き込んだことを後悔しながらも、何とかしようと必死に行動する。幻覚、妄想の世界でしか生きられなくなった俊。真っ暗闇のどん底に引き落とさた家族の行く先は！？

監督である内谷自身の体験に基づく、薬に溺れ翻弄された家族たちの真実の物語。日本芸術センター 第9回映像グランプリ賞受賞作品。

上映情報は『真っ白の闇』公式サイト <http://shiroyami.info> などから。



内谷正文 プロフィール

俳優、映画作家（公式サイト <http://bumi.jp>）
神奈川県茅ヶ崎市出身、埼玉県志木市在住

- 2005年2月 一人体験劇の活動開始
- 2007年 学校公演開始
- 2009年 朝日新聞「人」欄に掲載
- 2014年 少年院での慰問公演開始
- 2014年 NHK 首都圏ネットワークでドキュメント放送
- 2015年 『今日一日を生きる LIVE プロジェクト』を立ち上げ様々なアーティストとコラボレーション
- 2015年 テレビ朝日「ワイドスクランブル」等で紹介される
- 2016年9月 ニューヨーク・マンハッタンでの公演
- 2017年11月 一人体験劇を映画化。初監督を務めた「真っ白の闇」が日本芸術センター 第9回映像グランプリ賞受賞。

写真：川久保繁樹